

# 宮古諸島の文化財

# 宮古諸島



やびじ  
▲八重干瀬 P.119



凡例



世界遺産

●国指定史跡

▲国指定名勝

●県指定史跡

▲県指定名勝

●登録記念物

★特別名勝



道路凡例



国道



幹道主要地方道



県道一般道



高速道路



市町村境界線

## 大和井

●指定年月日／1992(平成4)年12月18日



大和井は、宮古島西側の宮古島市街北東に位置する洞穴内にある井戸です。琉球国時代、宮古の行政などの記録をまとめた古文書\*「雍正旧記」の内容から、1720(康熙59)年に掘られたものと考えられています。井戸の周りは大小の切り石が円形に積み上げられ、通路には昇降用の石段が設けられています。

大和井は、首里王府派遣の\*在番役人など一部の者のみを使用した特別な井戸で、一般の人々には開放されなかった



## DATA

所在地：宮古島市平良字西仲宗根不佐手、土川

といわれています。また、泉に至るまでに2カ所の門があり、水守りがいたとの言い伝えがあります。一方で、大和井の近くにあるブトゥラガーは、一般の人々が使用する井戸でした。

このようなことから、宮古島の人々と水の関わりや石工技術の高さを示す石造遺跡として他に例のないものです。

大和井から南西約40m離れた場所には、牛馬専用の大川があります。大川の掘削年代の詳細は不明ですが、「雍正旧記」には1717(康熙56)年に補修工事が行われていることが記載されています。数多く存在する\*井泉の中で、牛馬専用を目的としたものは極めて稀ということで、追加指定が行われています。



大和井 (宮古島市教育委員会提供)



ブトゥラガー

国指定名勝

しも じ じま とお いけ  
下地島の通り池

●指定年月日 / 2006(平成18)年7月28日



東側の池

国  
名  
勝

下地島の通り池は、下地島にある景勝地の一つです。下地島は宮古島市の西端に位置し、島は琉球石灰岩に覆われ、低く平らで楕円形の島です。

島の西側には標高8～15mの\*海岸段丘が発達し、\*カルスト地形からなる複雑な海岸線になっています。池は大小二つからなり、地下でつながっています。亜熱帯地方のカルスト地形の海岸地域に、雨水や波の浸食によって形成されたくぼ地で、絶壁に囲まれた独特の風情と美し

い水面を持ち、神秘的な伝承が残る景勝地として親しまれています。

この池には、海霊の化身である人面魚を釣ったため、罰を受けて津波で陥没した漁師の屋敷跡であるという伝承や、継子と取り違えて実子を池に投げ捨ててしまった罪深い母親の伝承が残っています。

通り池の洞穴及び水面は観賞上、芸術上の価値のみならず、その形成過程が学術上高い価値を持つ名勝地です。



## DATA

所在地：宮古島市伊良部字佐和田下地



西側の池

## 東平安名崎

●指定年月日/2007(平成19)年2月6日



東平安名崎は、宮古島にある景勝地の一つです。

岬は宮古島南東端に細長く突き出しています。琉球石灰岩からなり、長さ約2km、標高は約20mで全体的に平坦ですが、北東から南西方向に緩く傾斜しています。岬先端周辺には数mの津波石が幾つか散在しています。また、幅約120mの水路を挟んだ東方にサンゴ礁が発達しています。大きさは東西約2km、南北約1kmの楕円形状です。この礁の南端にパナリと呼ばれる琉球石灰岩の岩が



あります。

岬には、悲恋物語の古謡や民謡に謡われるマムヤの墓や機織りの伝承がある小洞穴などの遺跡があります。

岬からは宮古島南岸の海食崖の海岸が見られ、風光明媚な場所として知られ、眺望は壮観です。眺望のすばらしさだけでなく地形的にも極めて珍しく、岬及びその周辺一帯を含めて恒久的にその価値を保護していく必要性の高い場所です。



マムヤの墓



パナリ

## DATA

所在地：宮古島市城辺字保良平安名

国指定名勝

# 八重干瀬

●指定年月日 / 2013(平成25)年3月27日

国  
名  
勝

八重干瀬はその南端が池間島の北方約5kmの沖合にある、南北約18.6km、東西約14.5kmに渡る広大なサンゴ礁群です。南北に延びる卓状のサンゴ礁及び浅瀬や暗礁などからなる航海の難所で、古文書の中にも多くの船が座礁したという記録が残されています。一方で、広範囲に及ぶサンゴ礁では魚介類が豊富に捕れ、良好な漁場として利用されてきました。そのため長い間、八重干瀬を利用してきた池間島では、祭祀の際に八重干瀬の方に向かっ

て豊穰や航海の祈願がなされています。

また八重干瀬には、海上交通にまつわる神話や伝承が伝わり、古謡の中にもその存在が確認できるなど人々の生活や文化に大きく関係してきました。その他にも1年の内、日中の潮が最も引く旧暦3月3日には、海中から姿を現したサンゴ礁に女性が下り立ち、海水で身を清めるサニツと呼ばれる厄払いの行事も行われてきました。

このように、生活や文化に関わる海域であると同時に、八重干瀬が潮の満ち引きによって、その姿が現れたり消えたりする様子に人々は感動を覚えるなど、古くから景勝地として親しまれています。



## DATA

所在地：宮古島市平良子池間安段瀬

注意事項：定期航路はありません。



## 旧仲宗根氏庭園

●指定年月日/2016(平成28)年10月3日



旧仲宗根氏庭園は、宮古島市にある昭和初期につくられた旧士族の邸宅の庭園です。仲宗根氏は多くの宮古島の\*頭職を輩出した家柄で、地元で「忠導氏仲宗根家」と呼ばれています。

旧仲宗根氏の敷地入口に建つ門には琉球石灰岩の巨石を用い、門から続く通路を右手方向へ進むと庭園へ通じます。庭園は主屋の東側に位置していましたが、主屋は近年の台風により倒壊し現在はありません。作庭は1929(昭

和4)年に主屋が改築された際に、首里の庭師であった糸洲朝昌が行っています。

庭園は元々主屋からの眺めを主とする池庭で、主屋から見て左右に園池(庭と池)が伸びています。園池は複雑な形をし、5つの岩島を配しています。園池の左奥方向には滝石組が設けられ、左右の端には石の\*反橋が架かります。左の反橋からは滝石組の背後の築山(P154)上部へ向かって石段が続きます。

旧仲宗根氏庭園は宮古島に残る唯一の旧士族の庭園で、沖縄県の造園文化の発展に寄与した意義深い事例です。



## DATA

所在地：宮古島市平良字仲宗根

注意事項：一般公開されていません。



反橋(右側)



滝石組



県指定史跡

## ドイツ皇帝博愛記念碑

●指定年月日 / 1956(昭和31)年2月22日



ドイツ皇帝博愛記念碑は、宮古島市街地にある高さ205cm、幅76.5cmの石碑で、白色の大理石が用いられています。表面にドイツ語の文字が刻まれ、表面下部と裏面には漢文が刻まれています。

1873(明治6)年8月、中国を出帆したドイツ帆船ロベルトソン号が暴風にあって、宮古島宮国海岸沖で難破した際に、宮国集落の人たちが命がけで救助にあたり、乗組員6名が無事救出されました。救助された乗組員たち

は、一カ月余り村人から手厚い看護を受け、回復後に船を与えられ帰国しました。その話を聞いたドイツ皇帝ウィルヘルム一世は感激し、その感謝の意を示すために、1876(明治9)年3月に、この碑を建立しました。

この石碑は、当時の海外との交流を示す貴重な史料です。



ドイツ語の文字が刻まれた表面



漢文が文字が刻まれた裏面

## DATA

所在地：宮古島市平良字西里

県指定史跡

## 仲宗根豊見親の墓

●指定年月日／1956(昭和31)年2月22日



仲宗根豊見親の墓は、15世紀末から16世紀初めにかけて、宮古を支配していた仲宗根豊見親が葬られています。墓の構造は、宮古在来の「ミヤーカー」の形式と、沖縄本島の「横穴式」の両方の良い所を取り入れた形となっており、この時期における宮古と沖縄本島との石造技術の交流を示す貴重な墓です。

外観は前庭部を石垣で囲み、墓室外面は階段状に仕上げ、上端に石柱列を設けています。内部は円形で、直径

6m、高さ2mあまりで10畳ほどの広さがあり、中央に厚さ46cmの石垣が天井まで築かれ、前後2室に仕切られています。手前は棺並びに\*副葬品、奥は\*洗骨後の\*厨子甕の安置場所、仕切中央は幅1.27m、高さ1.70mの出入口になっています。出入口にはかつては観音開きの扉がついていたことを示す、切り込みの跡が上下に各2カ所ずつ確認されています。また、墓の正面左側にはウリガー降り井と呼ばれる井戸があります。



## DATA

所在地：宮古島市平良字西仲宗根真玉



墓の入口



降井

## 上比屋山遺跡

●指定年月日 / 1956(昭和31)年2月22日



宮古島市の砂川集落の南方に、低い石灰岩丘陵が北西から南東方向に細長く続いています。その丘陵の東端一帯に上比屋山遺跡があり、南側の砂川元島遺跡と合わせて、広大な集落跡を形成しています。

この遺跡からは、宮古式土器、八重山式土器、沖縄産陶器、南蛮陶器、青磁などが多量に出土しています。特に青磁は他の遺跡よりもかなり多く出土しており、これらの来歴についての解釈をめぐって、これまでいろいろな説

が出されています。「倭寇の根拠地」説や「貿易で栄えた港町である」という説がある他、上比屋山は城跡であるという伝承もあります。

他にも、宮古の人々が貿易に出かけたのでなく、この地は中継貿易的な自由貿易地域として栄えていたという説もあります。

また、この遺跡内には3カ所に御嶽(拝所)があり、頂上には砂川遠見[トウンカイフツイス](P160)があります。



## DATA

所在地：宮古島市城辺字砂川前原



入口の説明板と標柱

## 野原岳の靈石

●指定年月日／1956(昭和31)年2月22日



野原岳の靈石は野原岳の南側麓ふもとにあり、伝承によると、今から600年ほど前、野原岳一帯を支配していた大嶽ウブタキ・按司あじが野原岳に大嶽城を構え、城の守護神として祀まつったものといわれています。靈石は琉球石灰岩を加工研磨した円柱で、その大きさは直径約110cm、高さ約135cmです。靈石は初め野原岳（大嶽城）の北西側の眺望ちようぼうのよい高台にあり、そこはタマザラ御嶽ウツキと呼ばれる聖域でしたが、戦後に現在の場所に移されました。地元

では、この靈石のある場所をタマザラ御嶽とよんで、今でも信仰の対象にしています。

このような靈石の信仰は他の地域でも見られ、今帰仁なきじん城跡や勝連城跡など、いくらか形は異なるものの、靈石として信仰されている石が城内にあります。また小型ですが、伊良部島の伊良部元島遺跡にも野原岳の靈石と同型式のものが据えられており、これも靈石であると考えられています。

古い時代の沖縄における靈石の信仰や石材加工技術を知る上で、重要な遺跡です。

## ※靈石の信仰

石に神靈しんれいが宿るといふ信仰。石そのものに人知のおよばない不思議な靈力があるといふ信仰。



## DATA

所在地：宮古島市上野字野原麓原

県指定史跡

## スムリャーミャーカ

●指定年月日 / 1975(昭和50)年2月13日



スムリャーミャーカは、<sup>くりま</sup>来間集落の南約800 mにある  
<sup>スムリャー</sup>長間家一族のミャーカです。ミャーカとは、宮古に沖縄  
 式の墓地<sup>つく</sup>が造られるようになるまでの宮古在来<sup>ふうそうほ</sup>の風葬墓  
 地<sup>ち</sup>です。

スムリャーミャーカは古くは<sup>くりまウフトツ</sup>来間大殿ミャーカ、最近  
 はダンソーミャーカとも呼ばれ、大正時代まで使用されて  
 いたといわれます。

東西に約9m、南北約6.5 mの長方形で、高さは



2.5 mあります。上部は、3.5 m×3mの大きさの板状  
 の石でおおわれています。柱となっている石にはみぞの  
 跡があり、上部に木造の建物があつたと考えられます。

墓の内部からは、14～15世紀頃の<sup>せいじ</sup>青磁の破片が  
 見ついているなど、保存状態が良く、ミャーカの特  
 徴<sup>ちゆう</sup>をよくあらわしています。



## DATA

所在地：宮古島市下地字来間

県指定史跡

## 下地町の池田砦

●指定年月日／1977(昭和52)年7月11日



下地町の池田砦は、琉球国時代の砦（橋）で、咲田（崎田）川河口近くの国道側にあります。琉球国時代、平良から久松、川満を経て洲鎌、上地、与那覇へ通ずる主要道路の一部であった下地砦道と共に架橋されたと伝えられています。

正確な建築年代は明らかにされていませんが、古文書\*『雍正旧記』（1727年）に「池田砦、南北長二十間、横三間、高サ九尺五寸…」と砦の大きさが記録されています。



## DATA

所在地：宮古島市下地字上地ツボヤ

ることから、その頃にはすでに存在していたことが分かります。また、\*『宮古島在番記』という古文書によれば、1817（嘉慶22）年に下地砦道と池田砦が大破してしまつて、人や馬の行き来が難しくなつたので、在番であつた真壁親雲上らが話し合つて砦の大きな補修を行つたと記されています。

伝承では、工事を行う際、監督する役人が死亡したり重病になつたりして作業がはかどらず、そのうち悪い噂が広まり、交代する役人を見つけることも困難になつたので水神の怒りを和らげるため大きな牛一頭を生け贄にしてようやく完成したといわれています。

池田砦は琉球石灰岩を加工してアーチ型に積み上げて造られており、県内で現存するこのような砦は数が少なく、宮古島ではこの池田砦のみであることから、他に類例を見ない貴重な遺跡と言えます。

たか うす じょう せき

県指定史跡

## 高腰城跡

●指定年月日 / 1991(平成 3)年8月2日



高腰城跡は\*グスク時代の遺跡で、宮古島の東海岸側、  
字城辺の比嘉集落北の標高約 113 m の琉球石灰岩丘  
陵の頂上部分にあります。細長い丘陵上に広がっており、  
その西端の最も高い所に東西約 70 m、南北約 40 m の  
大きさで、野面積み (P56) の城壁が残っています。

古文書\*『雍正旧記』や\*『宮古嶋記事仕次』などの史料  
によると、この城の城主が高腰\*按司であったことや城内  
は南向きで長さ 30 間 (約 55 m)、横 23 間 (約 42 m)

の石垣があり、城の西側は険しい地形であることが記さ  
れています。また、時代が進むと高腰按司の子孫や村も  
なくなり、城囲いの石垣は野積みのづの石が残るのみであるこ  
とが記されています。

1985 (昭和 60) 年から 1987 (昭和 62) 年に発掘  
調査が行われ、その結果、鉢形土器はちがたどきと壺形土器つぼがたどきを主体に、  
\*陶磁器や古銭、鉄製品などが見つかっています。

この城跡はグスクとしての\*遺構をよく残し、また王府  
の勢力が及ぶ前の宮古島のようすを知るためにも重要な  
遺跡です。



## DATA

所在地：宮古島市城辺字比嘉仲尾嶺



城跡当時の様子 (写真：宮古島市史跡委員会提供)

県指定史跡

## 多良間島の土原豊見親のミヤーカ

●指定年月日／1974(昭和49)年7月11日



ミヤーカとは、宮古在来の風葬墓地で、沖縄式の墓地つくが造られるようになるまで宮古地域では一般的なものでした。土原豊見親のミヤーカは字仲筋なかすじにあって、墓内には、大きな板石を用いた\*箱式石棺墓はこしきせつかん 塚（ミヤーカ）が二基あり、一基は土原豊見親のもの、もう一基は夫人のものだといわれています。

墓の周囲は、高さ60cm程の琉球石灰岩の石垣で囲まれ、入り口はアーチ形の石積みになっています。その近く

に豊見親を祀った多良間神社があります。地元ではウブメーカと呼ばれています。

土原豊見親は15世紀の初期に、多良間に渡って未開の島を開拓し、島の草分けをした人物だと伝えられています。また、仲宗根豊見親が八重山のオケヤアカハチ征伐せいばつに出向いた際に、一武将として同行し活躍した人物といわれています。



アーチ形の入口と石棺墓

## DATA

所在地：多良間村字仲筋東筋里



県指定史跡

てら やま い せき  
寺山の遺跡

●指定年月日 / 1974(昭和49)年7月11日



寺山の遺跡は、那覇の奥武山にあった龍洞寺の住職心海上人が多良間島に滞在した時の居住跡といわれています。心海上人の経歴については、不明な点が多いものの、1697(康熙36)年から1711(康熙50)年の14年間多良間に滞在し村人たちを教え導いたと伝えられています。

現在、拝所になっている「とんばら<sup>\*</sup>」と呼ばれる大きな岩の上には、梵字などが刻まれた碑があり、その碑文には心海上人が1701(康熙40)年に、島民を災厄か

ら救うために経塚を建立したことが明記されています。また、ウプメカ(土原豊見親のミヤーカ(P128))を建造し、運天家と富盛家の庭園に日本式の池を造ったとされています。

心海上人は、沖縄本島でも真言教学の造詣が深く、高德の僧として尊敬されていた人物で、その教導は多良間島でもこの寺山を中心にして広められたといわれています。

このようなことから、沖縄の仏教史を考える上でも貴重な遺跡と言えます。



## DATA

所在地：多良間村字塩川大道里



梵字などが刻まれた碑



とんばら

※「とんばら」とは、方言で大きな岩のこと全般を指す。

